

執筆者紹介

鈴木奈穂美 すずき なおみ 本学経済学部准教授

高橋 祐吉 たかはし ゆうきち 本学経済学部教授

〈編集後記〉

今号の内容は、北海道・釧路市の生活保護受給者の自立支援プログラムが全国的に注目を集めていることについての実態調査に基づく考察である。釧路市では2006年から高齢者世帯を除く全世帯を対象として「釧路市生活保護自立支援プログラム」がスタートした。このプログラムの中で「中間的就労」という概念が誕生している。これは、厚生労働省の専門委員会報告書の影響を受けており、「自立」を「就労自立」（経済的自立）に限らず、「社会生活自立」、「日常生活自立」の総体としてとらえている。そして、これを図示した「釧路の三角形」（釧路市自立支援プログラム）を2本の論考がともに紹介している。しかし、この「三角形」では頂点が「就労自立」になっていることについて、釧路市のワーキンググループが再考し、「社会生活自立」が頂点ではないかと提起するに到っている。この結論には賛否があり、そう簡単ではない。そこで、この論点を深めるために、社会的排除と社会的包摂の概念や労働のあり方（正規雇用と非正規雇用、労働と非労働）についての検討がそれぞれに行われている。

さて、残りの紙面は蛇足である。2本目のT氏から、本体前後の部分の「笑い」について評価してほしいと懇請されたことについて触れておく。そこには「笑い」の意味や分類、「欲」の分類や文人風の「老い」の考察などがある。冒頭部分にも、「社会保障に関してはほとんど素人に毛の生えたような（あるいは毛も生えていない？）知識しか持ち合わせていない」と妙に力が入った自虐調の「健気な（毛無げな？）」表現が見られる。また、T氏が熱っぽく語っている石川啄木はちょうど2012年が没後百年に当たるが、森鷗外や志賀直哉も含めて、その最期の様子や、遺言・葬儀・墓などについては、没年齢順に著名人の死を描いた山田風太郎『人間臨終図巻』（徳間文庫＜新装版＞全4巻、2011年）を参照されることを望みたい。（T.F.記）

平成23年12月20日発行

神奈川県川崎市多摩区東三田2丁目1番1号 電話 (044)911-1089

専修大学社会科学研究所

（発行者） 町田 俊彦

製作 佐藤印刷株式会社

東京都渋谷区神宮前2-10-2 電話 (03)3404-2561
